

そうぜんじ便り

19世 俊諦和尚筆

第141号
令和2年 お盆号
臨濟宗 宗禪寺
建長寺派
住職 高井和正
閑栖和尚 高井正俊
羽村市川崎2-8-20
TEL 042-554-1276
FAX 042-578-3525

お盆を迎えます。お寺では毎年お盆供養の施餓鬼法要を営んでいます。本年はコロナのため、規模を縮小して儀式を行います。

セガキ 施餓鬼 大法要

七月十五日(水)

◆十三時 開場・受付開始

◆十四時 孟蘭盆供養

セガキ 施餓鬼大法要

- 新盆以外の方は受付で供養封筒をお出したいただき、施餓鬼幡をもって墓参をして下さい。
- 本年は施餓鬼棚を外に設定しますので、墓参の折に水向けをお願い致します。
- 儀式参加者の皆様は、玄関で手を消毒、マスク着用でご参加いただきます。
- 先祖代々等、孟蘭盆供養のお塔婆は随時受け付けております。一本三千円です。
- 新盆をお迎えする皆様には、お塔婆を一本用意致します。
- お布施(施餓鬼供養料と付届け)は封筒の通りです。ご協力の程よろしくお願い致します。
- 羽村とうろう流しは、昨年の台風の影響により河岸が使用できませんので、本年は中止となりました。
- お盆の早朝坐禅会がございます。七月十三日〜十六日、毎朝六時から七時です。

施餓鬼法要儀式へのご参加は、新盆をお迎えする皆様で
ご希望される方のみとさせていただきます。

施餓鬼大法要
式次第

- 13時** 受付開始 新盆をお迎えする皆様は受付をお願い致します。
- 14時** 施餓鬼大法要
 - ・施餓鬼和讃を参加者全員でお唱えします。
 - ・読経、水向けと施米(餓鬼に水とお米を施します)
 - ・ご参列の皆様にご水向けと施米をしていただきます。
- 15時** 法要後に和尚と総代様からの御礼のご挨拶があります。
 - ・施餓鬼幡(供養の目印)をもらってお墓参り。
 - 一軒に一本です。

コロナ期間の年忌法要について

二月からのコロナの流行により、お寺での年忌法要も延期をされる方、参列者を減らして行う方、法要後のお食事は皆さんされずに帰られるなど、対応はお家ごとで様々でした。

お寺としてはご依頼された分につきましては通常通り法要を執り行っておりますが、次のようなことも可能です。

○お塔婆をお建てして墓参のみで行う
○一年後に仕切り直しで行う

○食事はせずに、お弁当をご用意する
今回は事情が事情ですので、三回忌以降のご供養に関しては、一年遅れて行うこともやむを得ないことと思います。

一周忌の場合は、一年経つと三回忌となつてしまいますので、一周忌法要をされない場合は、お塔婆を建てて墓参供養にて行い、三回忌を盛大に行うこともできるかと思えます。

ご法要につきましては、何かございましたら、お気軽にお寺にご相談ください。

土地買収のお知らせ

宗禅寺の薬師堂裏の駐車場の隣に畑があります。このほど、この隣接する土地をお寺で買収しましたことをご報告申し上げます。当面は駐車場として活用することになります。この土地によって、新奥多摩街道を渡ることなく、お寺に立ち寄ることができる駐車場が増えることとなります。完成をお待ち下さい。

お寺にカブトムシが現れた

春のお彼岸から本堂正面に色とりどりのカブトムシが現れました。「今日の気分の博物誌」と題されたカブトムシで、人間の一瞬の感情をカブトムシにて色とりどりに表現したもので、毎年春の文化展に出品して下さる大船の幼稚園理事長先生、石井秀卓様による作品です。

「なんとかなるさ」そういうオーラを持つ人、家族や会社などに必要かもしれませぬ。気の持ちようで状況は変わる。

「動じず」こうありたいものです。あ、でも少しは右往左往した方が人生は楽しいかな。などなど、作品に付いているメッセージが素晴らしく、不思議と力をいただける作品です。



春の文化展を来春に延期

春のお彼岸に予定していましたが、文化展は来春のお彼岸に延期させていただきますことが正式に決定致しました。

特別展の羽村アート展もそのまま来春に持ち越します。お楽しみにお待ちしております。

第38回 羽村とうろう流し 中止のお知らせ

毎年八月の第一土曜日の夜に羽村灯籠流しが実行委員会の皆様によって開催されています。

本年ですが、残念ながら昨年上陸した台風十九号の影響により、河岸の使用許可が降りなかったため、中止となりました。中止のため、今回のお便りには灯籠流しの封筒が入っていません。また、来年お会い致しましょう。

「麦鉢」振り込みか ご持参になります

今まで秋の麦鉢のお布施は、島田弘さんが直接訪問してお預かりしておりましたが、この秋より振り込みか直接お寺にご持参いただくことになりました。そのため、従来訪問していなかった檀信徒様にも、全て通知をさせていただきます。麦鉢でお預かりしたお布施は、寺の備品や維持・修繕のために使われます。御協力をお願い致します。

寺墓地の分譲をしています

駐車場用地の確保のため、お寺の基本金を使用しました。基本金の確保のため、改めて墓地の永代使用権の分譲をご通知致します。

区画の大きさにより七十五万、百五十万等ございます。金額に関してましては、ご相談もしていただけますので、ご親族やお知り合いの方でお墓を求める方がおりましたら、お知らせいただければ大変有難いと存じます。

寺には万霊供養塔もあります。檀信徒の皆様は永代供養塔になります。

後継を心配されている方の御納骨もお受けします。これもどうぞご相談下さい。



新型コロナウイルスへの 対応について

宗禅寺では六月半ば以降から、木彫教室や健康体操が再開、土曜講座も七月から再開致します。再開にあたって、コロナ防止に向けてできることを行っています。

○玄関先に消毒液を用意しました
○書院・客殿の机、トイレ等使用後に消毒をしています。

また、お寺で行われている坐禅・写経等の活動にご参加くださる皆様方にもお願いがございます。

○マスク着用（忘れた場合、お寺にもございます。お声がけ下さい。）

○発熱はもちろん、体調不良の場合はご参加をお控え下さい。

○お寺を会場にしての葬儀・法要は通常通り行えます。葬儀・法要後の飲食はお寺にご相談下さい。お持ち帰りのお弁当をご用意することもできます。

緊急事態宣言が解除されたとはいえ、まだまだ安心の日常ではありません。一日も早く終息することを祈っております。

『蘭溪録』出版

訳著 彭丹さん

この度、建長寺開山・蘭溪道隆禅師の語録の現代語訳が完成し、『蘭溪録』として出版されました。

日本の禅宗を方向づけた禅師の当時のお言葉が、わかりやすい現代語で読むことができます。

お手元にご希望の方は宗禅寺まで問い合わせください。

また、「鎌倉春秋」五十周年記念号に、「蘭溪録」の記事が掲載されました。許可をうけ転載させていただきます。この本は正俊閑栖和尚の企画により出版されました。



建長寺の大仕事

三木 卓

二〇二〇年五月がやってきた。

五月は年に二回来るが、ここは老翁のお生まれあそばされた日、十三日が来ると御年八十五歳と相成る。

ここまで来たんだから、まあなんとかなるだろうな。冥土の旅の二里塚でもあるんだから、大よろこびすることはないが、感慨がないわけではない。

また五月は新茶の月。私は茶所の静岡が故郷で、少年時代を送った。今もなお「さあ、いっぱい飲めよ！」と取れたての新茶を送って

下さる友人・知己もいらつしやる。

フランスでは、その年のブドウ酒の新酒を「ヌーヴォ」と呼んでたつとび、みんな解禁日を待っている由。われら静岡人は「新茶」を今年の「若葉」の味として、味わう。「ヌーヴォ」も「新茶」も、その若さを味わうのだから、年代もののワインのような妖艶な境地をおこながりながら味わうという凄みではないが、新しいものを新しいとして楽しむのもまた、いいものだ。

安物の湯呑みで、今年の日本平あたりの新茶をゆつくりと味わっていると、大きな本がとどいた。差出人のところに、ほうたん、と

平仮名で書かれている。わ。彭丹さんからだ。表紙には『蘭溪録』（禅文化研究所・三〇〇〇円）とある。

蘭溪といえは、これは蘭溪道隆禅師のことだろう。かれはかつて宋から日本へわたって来た禅僧で、鎌倉に建長寺を開山した大変な人だ。

ページをひらくと、臨済宗建長寺派宗務総長さんの長尾宏道さんが「この度は、彭丹先生の長年にわたるご努力によって、建長寺の開山様である大覚禅師、蘭溪道隆和尚の『語録』の現代語訳が完成いたしました」と書き出している。え。なんだって。

もちろん「語録」は大切にされてきた。しかし禅師はそもそも中国の人なのであるから原文は当時の中国語で書かれている。日本人は中国文化を学ぶために中国語の古い文章を日本ふうに残る巧妙な技術を身につけて来たから、その漢文の読み下し技術で、その著作の翻訳もつくって来ていた。

しかしこの読み下し文がなかなか難物なのである。

わたしは学生時代にこの方法を「応学んだけれど、それでほかの漢文を自由に読めるようになどまったくならず、中国のものどころか昔の日本の学者や武士の書いた漢文や漢詩

も読めないままにきている。大学の先生に聞いてみたら、「今の東京大学の国文を出ても、ふつうに勉強しただけでは、読めるようにならないでしょうなあ」といわれた。

道隆師のこの語録も、漢文の読み下し文は、とうにさまざまな努力によって出来ている。それを読めば学識の深い者は理解し、体得してきた。日本人は、わかるうとしていっしょうけんめい勉強してきた。

しかし、中国から漢字をいただいたにしても、日本語と中国語は別の語族のことばである。ひとつの漢字のもつ概念もずれたりちがったりする。

「蘭溪道隆和尚の語録を現代日本語に訳してみませんか」と彭丹さんに行ったのは、前の建長寺の宗務総長の高井正俊和尚だった。高井さんだったんだ、とその温顔を思い出しながら、かれましたら、きつと思いつくと思った。

漢文書き下し文は在る。それによって、禪を学ぶものは理解し会得して来た。わかる学識のある者は、わかっただろう。しかし、わたしは、漢文の書き下ろし文に接するたびにいつも自分は七分かそこらしか理解していないのではないか、という疑いを抱かざるを得なかった。おそらくふつうの今の日本人は、そういうふうに感じて来ていると思う。

やっぱり現代語訳がほしい。それを中国人

の彭丹さんがやってくれた。

彭丹さんは、そもそもは中国四川省の出身で、中国と日本の比較文化を研究するために来日した。わたしはなんにも知らない者だけれど、かつて彼女の『中国と茶碗と日本と』（小学館）を読んだらとてもおもしろかった。中国のお茶わんが、日本にわたって来て、同じく中国渡来の禅宗とかかわりながら、大きな文化を形成していく。茶道は戦国時代の武士たちにとって生の哲学のような力を持つようになり、千利休のような人が活躍する。中国からわたって来た美しいお茶わんなどが、かれらのあいだで力を発揮する。

わたしはとてもおもしろかったので、この本のこと「日中は深い」というタイトルで「鎌倉その日その日」の二〇二年・二月号に紹介させてもらった。彭丹さんの日本語はとてもしつかりしていて、龐大な彼女の知識や理解はとても楽しかった文化の不思議さもわかった。

その昔、日本へ中国の文物はほとんど輸入されていた。たとえば材木座の海岸などから青磁のかけらが発見されているし、多くの寺院境内からも発見されている。つまり鎌倉は直輸入だったらしいのだ。

中国磁器の最高といわれるのは、日本では砧とよばれる美しい青のものだが、彭丹さん

がしらべていくと、これを輸入したのは蘭溪道隆だろうということになった。道隆は四川出身だが、彭丹さんも四川省の出身だった。四川には砧そっくりの磁器の出土があるという。また建長寺にも青磁の破片が沢山あった。かつての鎌倉はそういう文化的位置にあった。

彼女の著書『唐物と日本のわび』（淡交社）という本を読むと、かつて彼女も文化大革命の余波を受けた人らしい。わたしも「批孔」（孔子否定の運動）などという言葉を聞いたときはわが耳をうたがったのを覚えている。もしかしたら、日本の色はついてしまっているが、かつての中国の堂々たる文化が日本にのこっているということが、彭丹さんを日本に呼び寄せた理由ではなからうか。

その彭丹さんが、今度、同郷の大先輩、蘭溪道隆の語録を日本語訳された。よくおやり下さったと思う。

相手はしかし大禅僧の語録である。禪の言葉は、なおかつやさしいとはいえない。わたしの妻は、鎌倉の禅宗寺の一つ浄智寺にねむっているが、わたしは「自力」という禅宗の考えに共感するものをおぼえる。頭をひねりながらこの本を座右において生きようと思う。彭丹さん、日本人のために大いに意義ある仕事をなさった。おめでとう。

（作家・岡本在住）

新型コロナウイルス感染拡大により、不要不急の外出制限をしいられ自粛生活の日々が続きました。自宅にこもっているという時間をもてあますことになってしまいましたから、以前から気になっていた一冊の本を読み始めました。

昨年度の直木賞と本屋が選ぶ時代小説大賞をダブル受賞した川越宗一氏の『熱源』です。

樺太(サハリン)生まれのアイヌ、ヤヨマネクフ。ロシア帝国の専制政治に反旗をひるがえし、皇帝暗殺事件の容疑者として逮捕され、サハリン島へ流刑されたリトニア生まれのブロニスワフ。

二人は樺太の地で出会い、強者の論理や文明という名の侵略によって、アイデンティティを揺るがされながら、自らの存在価値を求めあう生き様を描く。

ヤヨマネクフは、幼いころ流行病で両親を亡くし、引き取り手の一家とともに北海道に移住。妻をめぐり、息子をもうけるが、天然痘の流行により妻を失い、「いつしか生まれたところに帰りたいという」彼女の願いに、また樺太に帰郷。樺太では、アイヌの子どもたちのための学校を作る手助けをする。

懲役一五年、サハリン島で流刑入植因としてのブロニスワフは、原住民ギリヤーク人に興味を持ち、暮らしや言葉を調査し、記録していくうちに、流人として魂の死を待つばかりだった自分を蘇らせ生きた熱を分けくれた彼らに、自分は何ができるかを問う民族学者となっていく。

南極探検隊に樺太の係として参加することになったヤヨマネクフは、南極点に島のアイヌがアイヌといて生きたる故郷を作ろうとやってきたが、到達が不可能になった現実に自暴自棄になりながら友人に諭され、あらためて樺太が自分たちの故郷であることを知る。

「生きるための熱の源は、人だ。人によって生じ、遺され、継がれていく。それが熱だ」と熱い感覚が広がり、生き抜こうとする。

『熱源』では、大勢のアイヌやギリヤークの人々、金田一京助や大隈重信、二葉亭四迷といった人物が登場し、お互いの「熱」をぶつけ合うように物語が展開していき、四二〇ページを超える大部な歴史小説でしたが、一気に読み通すことができました。

『熱源』には春先から一月まで、場所を変えながら鯨や鱈、鮭が豊富に獲れる様子やそれらの漁場を函館に本拠をおく日本人がいたことが書かれていました。その箇所を読みながら、ある人物のことを思い出していました。

中里介山の友人、羽村与三郎です。与三郎は、明治一七年(一八八四)九月、羽村太郎の四男として生まれました。介山より一歳年上でしたが、家庭は貧しく、兄弟は多かつたため他家に身を寄せて生活していました。

介山が明治三六年(一九〇三)に再度上京し、北豊島郡岩淵小学校の代用教員となると、しばらくしてから与三郎も上京。与三郎は、牛乳屋をはじめのかたわらロシア語を学ぶ。やがてシベリア方面に放浪し、辛苦をかさね明治四〇年ころから鮭鱈漁撈に従事し、後に漁業権を獲得し、漁業家となりました。

羽村与三郎は、千島列島の最北端、シユムシユ島やアライト島付近、樺太の北、間宮(タートル)海峡付近等を漁場としていました。昭和六年ころには北洋漁業の基地・函館に店舗をかまえますが、ソ連邦の誕生により漁業権を失い、帰郷ののち、中里介山の印刷工場を引き受け、昭和印刷という会社の経営に専念しました。

与三郎の墓碑には、「郷里ニ引キ揚ケントスルヤ翁ヲ敬愛セル彼ノ国人ハ哀別ノ情切ナルモノアリタリ」と刻まれています。彼もまた北の海に熱を感じ、船を所有するほどの事業家となったのです。

《参考図書》

『羽村町史』。桜沢一昭著『中里介山と大菩薩峠』。『隣人之友第六十三号』。

和正和尚日單

コロナの影響により、宗禅寺は土曜講座、春の文化展、花祭り法要、花祭り花展、土佐源氏公演、江尻南美さんピアノコンサートが中止となりました。ご法要の延期もありました。

個人的には本山建長寺での行事荷担もなくなり、消防も火災時出勤のみ。保護司も総会、研修会等活动が中止です。坐禅会、写経会は継続的に行っていました。が、さすがに五月一杯までは毎回数えるほどの方のご参加のみでした。

娘たちの幼稚園は六月から再開しました。富士学院幼稚園は園児数が多くないので、分散せずに毎日みんなが登園しています。娘たちは三月半ばから、全く外出していませんでしたので大変有難いです。

○春のお彼岸 多くの皆様が墓参に来て下さいました。 3 / 17 ~ 23

○市役所 保護司羽村分区分会。四月予定の総会へ向けての集まりでした。事業と予

算の報告と計画案。後に総会は中止となりました。 3 / 24

○蚕影神社 近くの永昌院様とのご縁でつくばの蚕影神社のお参りにいくはずが、中止に。 3 / 28

○筍 四月半ばころからお寺の竹林に筍がよきによき。コロナを知ってか知らずか……。娘たちと筍堀り 4 月

○総代会 お寺で総代会。隣接する土地の買収、宗教法人規則改正の承認をいただく。お盆の施餓鬼は規模縮小にて行うことが決定 5 / 14

○オンライン講演会 正俊和尚がオンラインにて講演。本来は対面での講演のはずが、コロナでオンラインに。お寺のパソコンもこの機会に新しく致しました。 5 / 23

○谷中 緊急事態宣言の解除と幼稚園の再開も見えてきたので、娘たちと家族で谷中へ。娘たちは二ヶ月半ぶりの外出。みんなで墓参。祖父母と兄夫婦家族と過ぐす。 5 / 25

○書道教室 毎月一回和尚さんが書道のお稽古をしていますが、再開されました。 5 / 27

○寺子屋委員会 休止していた寺子屋委員会も再開。まずは延期していた文化展について。とりあえず秋のお彼岸にとしていましたが、一年延ばして来春に開催することに決定。羽村アトにご期待下さい。勉強は、中野喜一さんご寄稿の島田改助氏の豚の彫刻と天王様。文庫長の羽村の俳諧史。 5 / 31

○幼稚園 進級式へ。今年から二人は別々のクラスに。星組と月組。宝塚歌劇みたい……。森先生は三年間一緒。田中先生、今年からよろしくお願い致します。 6 / 1

○病院 花音が舌小帯短縮手術を受けるかどうかの検診へ。いわゆる活舌を良くする手術だそうで、日頃診ていただいている先生から可能性のご指摘を受けていたが、手術の必要なしとの診断をいただきホッとしました 6 / 2

○土地契約 お寺に売り主様と仲介業者さんがお越し下さり、土地の売買契約。中野総代長、新井総代立ち合いのもと、完了。 6 / 2

正俊閑栖未完成日記

皆様、この春はいかがお過ごしでしたか。予期せぬコロナ生活。それぞれいろんな思いを持たれていたと思います。お寺も来参の方が半分になりました。予定していた諸行事も多く中止となりました。私も寺仕事と体重管理に精進しています。

三月

○朝粥坐禅会十三人。写経の会十三人。文化展実行委員会三十人。にぎやかに三月が始まりました。 1日

○花祭り花展打ち合わせ五人。ご詠歌練習十三人。 2日

○羽村とうろう流し 会場使用不能 8日

○あちこちでコロナに戦々恐々 10日

○写経の会で東日本大震災追悼・復興の法要二十人。西東京臨済会托鉢中止 11日

○体重六十九キロ代に。麴町ユニテ画廊。 13日

○円覚寺足立大進前管長二七日弔問。建長寺長尾総長と今後の相談。

○コロナ感染防止のため、文化展・花祭り行事中止の決定。ご詠歌・健康体操・うどん教室・木彫教室も。但し、坐禅会と

写経会は継続。 14日

○彼岸中 朝の坐禅会はいつも通りに行いました。ありがたいことです。

○鎌倉から来客。文化展のなごり展示。岡田七歩美さんもモザイク和尚。石井秀卓さんのカブト虫。十三人で宴。 20日

○写経の会十人。坐禅会十二人。後席のお茶の会は取り止め。 21日

○十時半鎌倉・松ヶ岡文庫評議員会。一番星画廊・伊藤恭子展。 23日

○お彼岸中の墓参来山者二千人。620件の受付がありました。若干の減。

○コロナ 不要不急の外出防止。次々と予定したことが中止に。お寺も。 27日

○体重68キロ代に。土曜坐禅会一人。 28日

●三月の来山者は二七三〇人でした。昨年は四五〇〇人。春の文化展の中止が主原因。コロナ恐るべし。

四月

○写経の会七人。『社会のしんがり』読む。とても大事な本。 1日

○鎌倉・円覚寺横田南嶺老師 建長寺吉田正道老師に、私が企画出版責任者でホータンさんが翻訳してくれた『蘭溪録』を

奏呈させていただく。ゆっくり歓談。もちろんホータンさんも一緒に。 2日

○横田老師、円覚寺のホームページ、管長ページで『蘭溪録』絶賛。 3日

○雨倉水道屋さん神明台に引越。記念に寺の井戸三ヶ所修理・新調依頼。 4日

○コロナ緊急事態宣言「やつと」。 6日

○鎌倉稲門会・兵藤芳明さん来山。ネパールの曼陀羅をお土産に持参。 7日

○花まつり 誕生仏と甘茶。 8日

○体重67キロ代に。和正住職、檀家名簿墓地調査確認作業終了。二十年以上の懸案が解決。墓地の掲示板も作成へ

○星巖さん、伊藤恭子作『星政伸へのオマージュ』持参。応接間に飾る。 11日

○写経の会・坐禅会参加者共に二人 11日

○ウォーキングと作務（境内諸掃除）が体調管理に大効果。禅センター本棚増設。片付け進む 14日

○墓地 南の新奥多摩街道の塀に、瓦を乗せ、白塗りをしてもらいました。とてもしくなりました。鈴木土建さんの寄付です。ありがたいです。 15日

○寺の西、隣地の畑、雨倉利夫さんを買取りの相談。 20日

- 体重66キロ代に。法事はいつも通りに行う。二軒ほど取り止めになるが、あとは予定通り。但し、参加する人は家族で少人数となる。四月、五月、六月。
- 境内の掃除・除草・片付け。やればやるほど、仕事が出てくる。綺麗になつてさっぱりして、気持も清々しくなる。
- 四月の来山者は四七〇人。昨年 of 半分
- 五月
- 写経の会四人。暑さ増しウォーキングを午後三時過ぎに変更。続いて、境内の美化作業に変更。汗びっしょりでシャワー。このスタイル実によし。
- 起床三時。八時半まで朝の日課。十時から内と外のふき掃除を始める。本堂から玄関、薬師堂、三社堂、山門、地藏堂へと。但し、雑巾三枚でやれる時間のみとする。六月現在日課に。 2日
- コロナのおかげで読書三昧。掃除三昧。健康三昧の生活になりました。
- 朝粥坐禅会 参加者九名。終了後、道路など桜の落花はき掃除。感謝。 3日
- 体重65キロ代に。ビール止め、食減 5日
- 石井勇さんと土地三ヶ所。諸相談 8日

- 寄居、保坂兄夫婦、金魚持参。四ヶ所の五右衛門風呂にいれる。防火防蚊 9日
- 『われらの子ども』『大本営参謀の情報戦記』『流人道中記』など読む。 10日
- 一日の生活リズムほぼ出来上がる 12日
- 体重64キロ代に。『蘭溪録』送付準備。
- 総代会開催(お盆・寺の規則・土地・墓地分譲・麦鉢・会館前由美・俊諦和尚二十三回忌・代表役員交代)など。 14日
- 川崎公園あまりに汚いので掃除。ほぼ一週間でほぼ終わる。犬仲間多し。 16日
- 西土地 雨倉利夫さん諒解 18日
- 新井自転車さんより金魚赤ちゃん来る 23日
- 丸和育志会オンライン講演会。八時〜十一時 23日
- 体重63キロ代に。十年ぶりの快挙。鎌倉の銀行へ。諸手続き完了。 28日
- 久しぶりに寺子屋委員会。七人全員集合。隠齋で、夕飯ナシ。 31日
- 五月の来山者は五一〇人。昨年は九七〇人です。半減。コロナがたたくさんの催しを中止しています。命が一番。六月に予定していた坂本長利さんの「土佐源氏」七月の「江尻奈美ピアノコンサ

ート」も中止になりました。春の文化展は来年の春へとそのまま持ち越しです。第二波が心配ですが、お寺の行事も次々と再開になります。土曜講座も七月から再開です。いろんなことに注意しながら、日常の生活を取り戻していきましょう。

●六月二日の総代会で西の土地をお寺で取得することになりました。駐車場で使用します。恥ずかしながら、お寺の基本金が激減しました。お寺の維持・管理は檀信徒の方々のお力によります。寺の墓地あと百ヶ所ほどあります。お求めいただき、寺を支える力となつて下さい。

宗禅寺観音募金

(令和元年12月16日～令和2年6月15日)

皆様からの募金、お賽銭をこのように使っています。ご協力ありがとうございます。

前回繰越 29,325円

収 入 101,550円

支 出 120,000円

内 訳	30,000円	羽村市社会福祉協議会
	30,000円	あしなが東日本大震災遺児支援募金
	30,000円	建長寺観音募金
	30,000円	新型コロナウイルス対策医療支援寄附金 (東京都保健福祉局)

繰 越 10,875円

講談・宗禅寺一本木堂薬師縁起（下）

講談師 菊地 玉雲作

さて本能寺の変の後、日本は天正十六年に豊臣秀吉が北条氏を破り、全国を統一いたしました。それから十年後関ヶ原の戦いが起こり、慶長八年（一六〇三年）徳川家康が江戸に幕府を開いたのであります。なんとすさまじい激動の十五年であったことをごさいます。

いつまた世の中がひっくり返るか、何が起きるか分からないという不安の中で戦国時代を生き抜いた人々は、先祖を供養し生活の安寧を願う拠り所を必要としました。

川崎村の人々は、十月の八日お薬師様の日に集まって、御籠りをしておりました。

「徳川様の世になつてから、もうだいたい戦がねえなあ。」

「このまんま安寧が続けばええがなあ。」

「戦がねえなら、巻き添えを食つて死んだ者の供養をしてやりてえ。」

「戦の時は甲いもできねえで、お経もあげずじま이었다。だからようこれからはみんなでちゃんと甲いをやるうじやないか。」

「だったら、川崎村も寺を持たなきゃあなるまいな。」

「村人みんなの寺をなあ。」

「村中総出で寺を建てようじやないか。この薬師堂を建てた時みてえにみんなで材木を持ちよつてなあ。」

「このような村人の願いを徳川幕府も認め、村の中心となる寺の建立が、幕府・村民一体となつて

推し進められていきました。こうして川崎村に一村一か寺として元和元年（一六一五年）堂坂の下、今の玉川町に宗禅寺は創建されたのであります。その後八十年、多摩川と玉川上水の間に在った寺は洪水・出水等で水の被害を受けること度々でありました。

このままでは寺を維持することは難しい。村人たちは皆で話し合い、知恵を出し合つて現在の場所（ここ）に寺を移転したのでございます。時に元禄八年（一六九五年）のことでありました。

一方、薬師堂は時代の変遷とともに敷地内で数度にわたり移転し、明治三十三年（一九〇〇年）に本尊の薬師如来像が盗難にあい荒廃が進んでおりました。

時代は進み、昭和二十八年（一九五三年）一月宗禅寺において薬師堂移築について、総代を中心とする協議会が開催されました。

「このまま放つておけば薬師堂は寂れる一方であります。川崎村の古跡をなくしては、ご先祖様に申しわけないと思うが、みなの方どうお考えなさる。」

「ご先祖様が苦労して創建された薬師堂をなくしちゃなんねえ。」

「一本木堂薬師の呼び名も由来話も後世に残すべきだ。」

「しかし、あそここの場所じゃあ管理がしにくい。」

「いつも誰かが見ているわけにはいかないなあ。」

「宗禅寺の敷地内に移転させてはどうだろうか。」

「寺の内に移転するとしたら、畑の埋め立てをしなければなるまい。」

「よし、みんなでやるべえ。川崎村はいつだってそうしてきたじやないか。」

「この際、お薬師様のお堂もきれいに改修しようじやないか。」

「それでは部落中及び檀家総出の勤勞奉仕作業をもつて、畑の埋立を行うものと致します。」

「なお、薬師堂改修にあたり広く寄付金を求むるものと致します。」

三月七日より工事作業が開始され、延べ人数三百九十三名の働きによつて四月八日薬師堂は落成いたしました。

続いて川崎村に住む彫刻家の島田改助氏による薬師如来像が完成したのは、昭和三十年八月のことでありました。

十月、本尊の開眼落慶法要が大々的に挙行され、村中が歓喜に沸き返つたのでございます。

一本樺の流木から始まつた川崎村のお薬師様は、和尚や村民、薬師講の人々の熱い思いに支えられ、今の時代にあつてもこんなに盛大な法要のお祭りが営まれているのでございます。

「オンコロコロセンチタリマトウギソワカ」

「オンコロコロセンチタリマトウギソワカ」

一本木堂のお薬師様は、こうして村人やおまつりする人々の心に留まり、いつも人々の健康と家内安全を祈つてくれているのであります。

この講談は本名菊地洋子さんが、正俊和尚の依頼をうけ、川崎の歴史や宗禅寺の伝承を元に創作して下さつたものです。

菊池さんは、愛知県瀬戸市の御出身で東京都の小学校の教員を三十五年間、おつとめになり、現在は退職されて、青梅にお住まいです。

土曜講座のお知らせ

コロナ禍のためお休みしていましたが、七月から再開します。おまたせしました。お茶代三〇〇円。

◆第四十四回 七月二十五日(土) 十三時～十六時

ごあいさつ

・仏教講座

閑栖 高井正俊
住職 高井和正

・「日本仏教史その6―弘法大師・空海―」
講演「大菩薩峠」を語る
講師 菊地玉雲さん

・「中里介石を学ぶ」

宗禅寺文庫長 島田秀男 さん

◆第四十五回 八月二十二日(土) 十三時～十六時

・仏教講座

住職 高井和正

・「日本仏教史その7―神仏習合―」
映画「みんなの憲法」を見る
憲法を勉強する会 羽村幸子さん

・「五日市憲法」を語る

高麗博物館館長 新井勝絃先生

◆第四十六回 九月二十六日(土) 十三時～十六時

・仏教講座

住職 高井和正

・「日本仏教史その8―末法と浄土―」
おかいこさん(養蚕)と永昌院
福生市 永昌院住職 桑林茂雄師

・世界を広げる新聞の力
NIE 企画デザイナー

鹿野川喜代美さん

※土曜日、お時間のある方々は是非お出かけ下さい。

鎌倉禅研究会開講のお知らせ

正俊和尚主管の鎌倉建長寺での公開講演会です。こちらも三月から休会していましたが、八月から再開です。入山料と資料代各五〇〇円。

◆第六十三回 八月二十七日(木)

早稲田大学大学院

・中世東国禅林の出版事業
白川 宗源 師

・都市鎌倉の成立過程 ―頼朝の時代―
大沢 泉 先生
鎌倉歴史文化交流館学芸員

◆第六十四回 九月十日(木)

・清拙正澄の大鑑清規

大鑑清規の会

・禅居院 副住職 山名田 紹山 師

・鎌倉禅宗と弁財天
長谷寺観音ミュージアム主席学芸員 三浦 浩樹 先生

新しく始まりました。

「お寺deこころの相談」

～カードを使った心理セラピー～

◆無料相談です◆

事前に電話で予約をお願いします。

- ◆毎週日曜日 午後1時～6時
- ◆場 所：宗禅寺 禅センター
- ◆問い合わせは 090-6792-4784 (ハムサ) まで

宗禅寺毎月の活動

― お寺で新たな自分の発見を ―

- 朝粥坐禅会…… 毎月第一日曜日 朝6時～8時半 一日の始まりに坐禅。坐禅後、禅の作法でおかゆをいただきます 7/5 8/2 9/6 10/4
- 土曜坐禅会…… 毎週土曜日 子供：18時～19時 大人：19時半～21時 繰り返し繰り返し深い呼吸を。イス坐禅もあります
- お盆早朝坐禅会…… お盆中毎朝6時～7時 (7月13日～16日) 朝の新鮮な空気を味わいましょう
- 土曜講座…… 毎月一回の勉強会。13時～16時 地域文化の共有と創造を目指し、地域伝統を後世に。7/25
- 写経会…… 毎月1日、11日、21日、13時～15時 般若心経の写経をしています。支度、片付けは全員で。
- 御詠歌…… 毎月第1・3火曜日 1時半～3時 指導：高井淑子
- 手打うどん教室…… 現在2クラス開講中。月一回。講師：島田辰夫先生
- 木彫教室…… 毎月第1・第3土曜日 13時～16時まで 講師：新井達矢先生 場所：宗禅寺禅センター 仏像や能面を自分で彫ってみませんか？ 月謝5000円 (道具、材料費は要別途)
- 俳句教室…… 毎月1回、適宜。問い合わせ先：中野つたえ ☎554-2444
- 尺八吹禅の会…… 毎月第1、第3月曜 夜7時半～9時頃 坐禅15分、練習60分、問い合わせ：坂井陵童 ☎554-3273
- 健康体操の集い…… みんなで基礎体力向上維持のための健康体操をしています。 直接、禅センターにお越し下さい 毎週木・金曜日14時～15時半 予約不要
- ◎女性サンガの会・薬師講・寺子屋委員会・護持会 ――活動中です――
- ◎宗禅寺禅センターをお使い下さい。